



来年は羽越水害から
50年

「語り継げ！羽越水害 子に孫に」

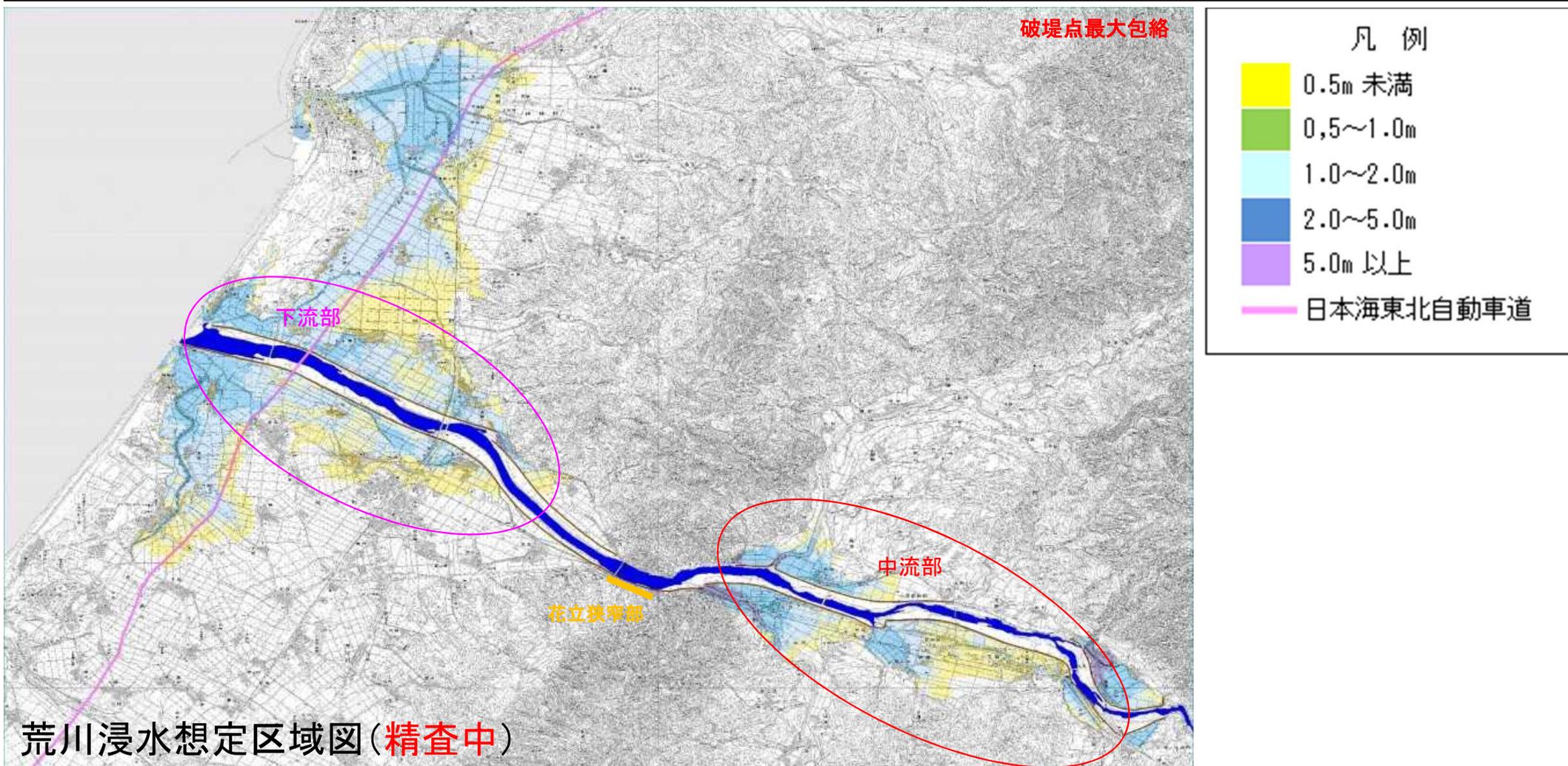
資料－3

減災のための目標(案)

- ① 朝日・飯豊山系の縁辺部と櫛形山脈の間に形成された溪谷部と盆地よりなる中流部。
(浸水深が大きく、洪水が吐けにくい地形)
- ② 花立狭窄部から日本海にかけての下流部は扇状地を形成。
(広範囲に甚大な被害が及ぶ)
- ③ 水源から河口に達する距離が短く、上流域が急勾配で下流への流入が早い
(水位上昇が早く、住民の避難できる時間が短い)
- ④ 新潟平野と小国盆地で、気候や降雨特性が変わる。
(下流域の住民が洪水氾濫の危機を察知しにくい。)
- ⑤ 本川は、古くから洪水による災害が発生しており、破堤跡が多数存在する。
(越水以外のリスク)

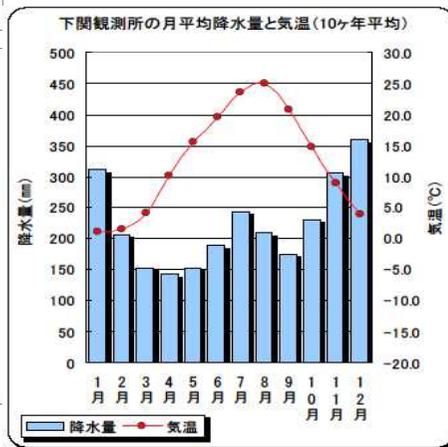
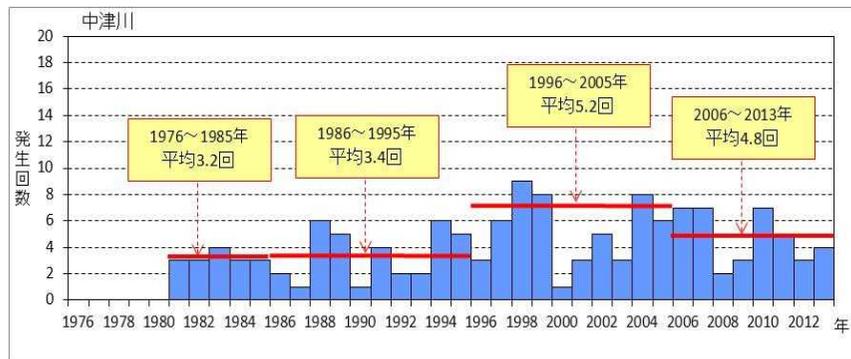
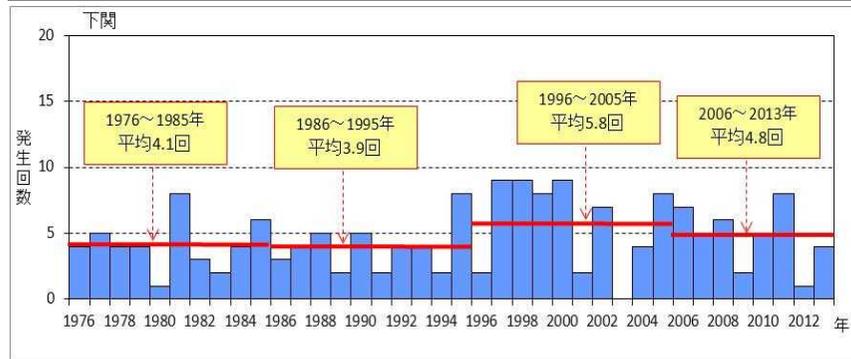
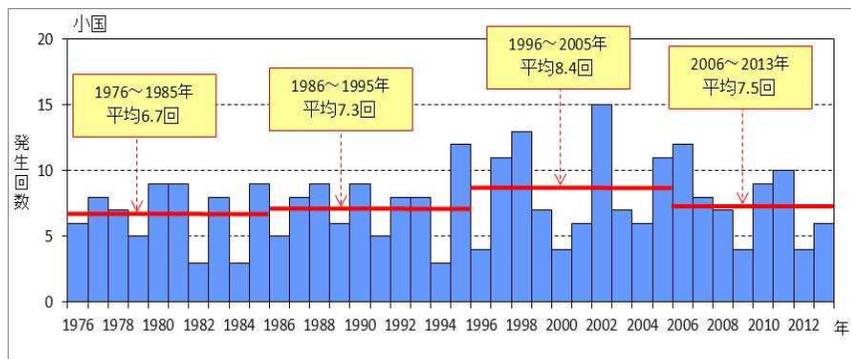
中上流部は貯留型、下流部は拡散型の氾濫形態となり、広範囲に甚大な被害が及ぶ

- 中流部では浸水深が大きく、洪水が吐けにくい
- 下流部では花立狭窄部から日本海にむけて洪水が拡散していく



荒川の降雨特性

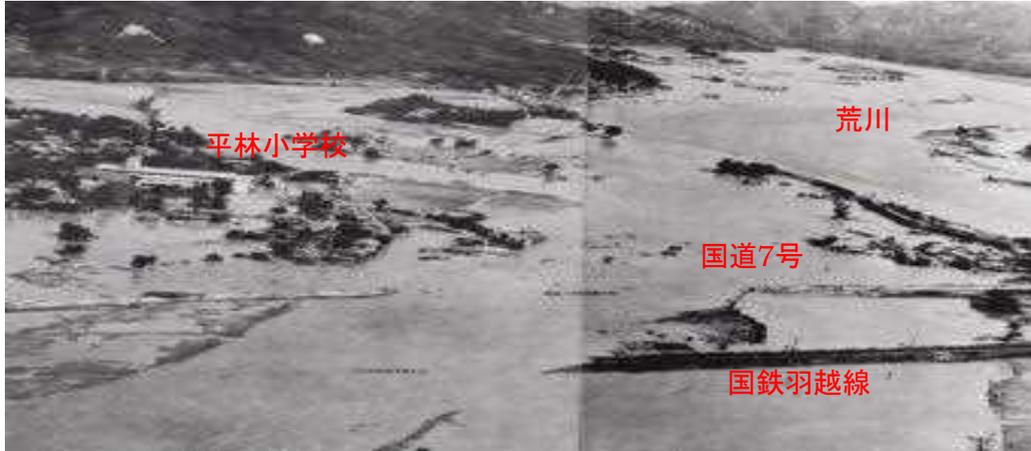
- 降雨量については、日本海気候に属し、多雨多雪地域であることから、度々、豪雨が発生する。
- 6月から7月にかけて梅雨前線がしばらく日本列島付近に停滞して、天候が変わりやすく非常に雨の日が多くなり、過去においてもしばしばこの梅雨明けに前線くずれの豪雨に襲われている。
- 秋期においても停滞性の前線により多雨をもたらすこともあり、本流域の豪雨も6月から8月に集中しており、前述の前線性の降雨によるものがその大部分で、台風起因するものは少ないのが特徴である。



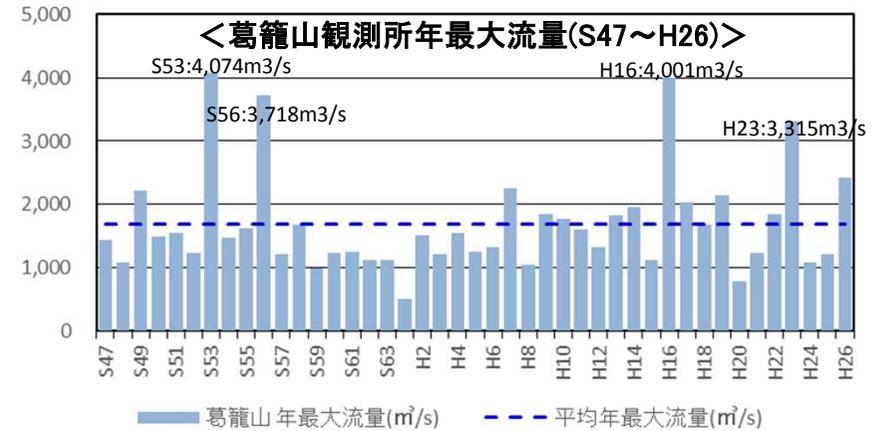
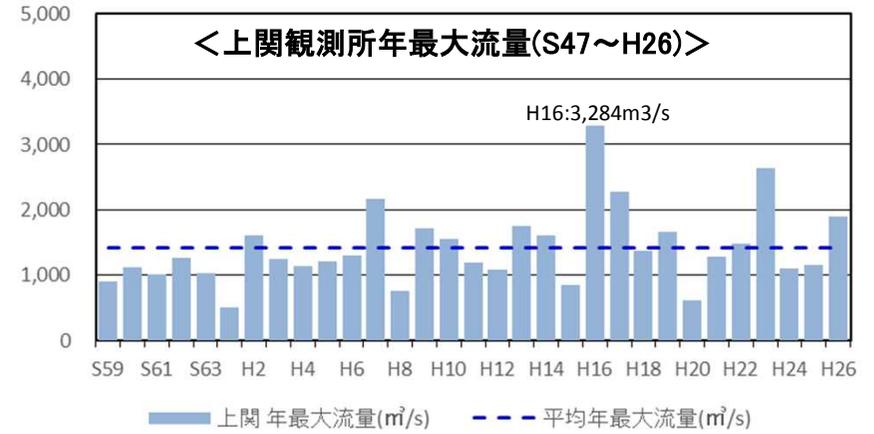
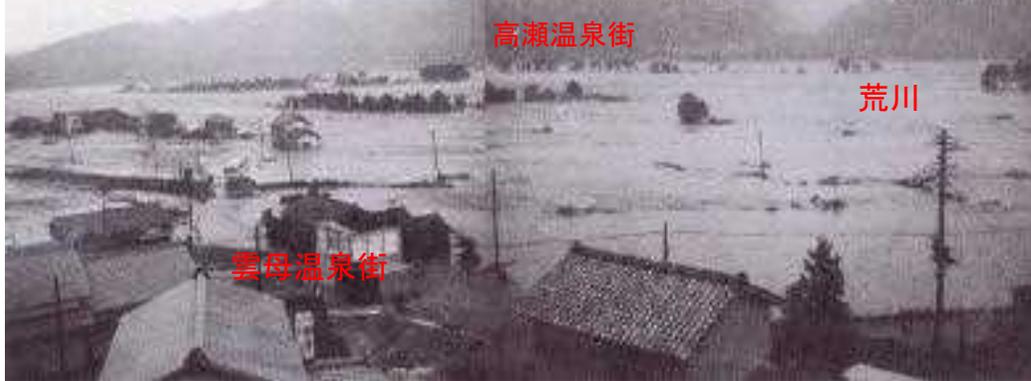
洪水の発生状況

■過去には昭和42年洪水等により甚大な浸水被害が発生しています。近年においては平成7年7月洪水、平成16年7月洪水、平成23年6月洪水により被害が発生しています。

昭和42年8月28日洪水（前線） - 羽越水害 -



堤防決壊による浸水状況（関川村雲母地区）



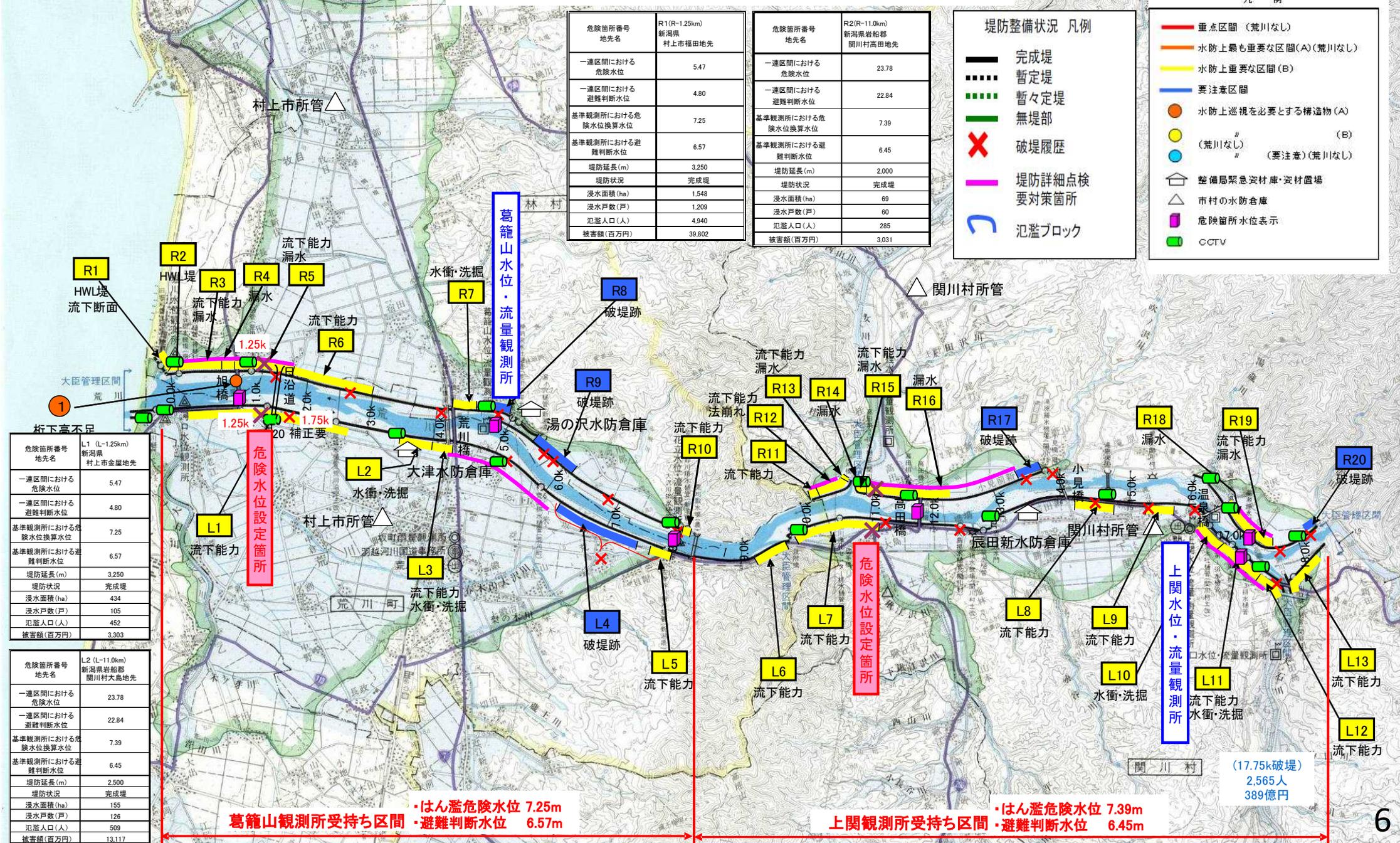
平成16年7月17日洪水（前線）



平成23年6月23日洪水（前線）



荒川重要水防箇所 位置図



- 荒川中流域は、朝日・飯豊山系の縁辺部と櫛形山脈の間に形成された峡谷部と盆地地形であるため、**氾濫流が吐けにくく、浸水継続時間が長期にわたる。**
- 荒川下流域は、花立狭窄部から日本海にかけて扇状地を形成しているため、**氾濫流が広範囲に拡散する。**
- 古くから洪水による被害が発生しており堤防には破堤跡が多数あり、**越水以外にも水害リスクのある箇所が存在している。**
- 洪水氾濫により、基幹交通、緊急輸送路である7号,113号線などが長期にわたり浸水するおそれがあり、**社会経済が大きな打撃**を受けるため、早期に道路機能を回復させ日常生活を取り戻すため、迅速な排水活動に取り組む必要がある。

■5年間で達成すべき目標

水位上昇が早く洪水の吐けにくい盆地と、広範囲に被害が拡散する扇状地の氾濫特性を踏まえ、荒川の大規模水害に対し、

『迅速・確実な避難』『社会経済被害の最小化』

を目標とする。

※大規模水害・・・想定し得る最大規模降雨に伴う洪水氾濫による被害

※迅速・確実な避難・・・氾濫流の流速が早く、避難が困難となる恐れがあり、氾濫流が到着する前に避難が必要

※社会経済被害の最小化:大規模水害による社会経済被害を軽減し、早期に再開できる状態